

ポパーの 3 世界論

伊藤 孝 (Takashi ITO)

ポパーは、3 世界論という特殊な思想を展開する。それは、世界 1 (World1)、世界 2(World2)、世界 3 (World3) に区分される。ポパーの主張する 3 世界論とは、3 つの世界から規定される思想である。そのような科学観は、厳密な意味で相互作用論でもある。すなわち、ポパーは、デカルト以来の心身問題を相互作用論で解決しようと試みる。あくまで心的状態と物的状態は、相互作用の関係にある。このプログラムは、多くの詳細な問題を残しているため修正が必要である。これを踏まえて 3 世界論は、展開されることになる。具体的にポパーは、世界 3 の実在性に基づいて相互作用論を説明する。まず、世界 1 とは、物理的状态、物体である。それは、世界 2 という心的状態や人間の心で世界 3 を産出する基盤となるものである。とりわけ、世界 3 は、世界 2 から思考内容の世界として作り出される。例えば、書物は、世界 1 と世界 2 の双方に属する。つまり、ポパーの 3 世界論によれば物的状態を示す書物は、世界 1 というカテゴリーに組み込まれる。併せて書物は、人間の創造した思考内容でもある。それは、世界 3 の実在性として把握されるべき物理的对象となる。すなわち、世界 1 を物象化した形式で 3 世界論の実在性は、心的状態と物的状態の相互作用に基づいて論証される。例えば、生産的な科学者は、世界 1 を変化させるため問題から出発する。ある意味では、世界 2 が世界 3 の対象を把握しようとする試みである。このことは、科学者による創造的な努力である。

ところで世界 3 は、人間の創造した産物である。それにもかかわらず世界 3 は、部分的な自律性(Autonomy)を保っている。それは、ポパーの 3 世界論において重要な役割を担う。あくまで世界 1 と世界 3 を相互作用させるには、世界 2 という人間の思考過程が必要である。これを踏まえてポパーは、世界 3 の自律性について説明する。なぜなら、世界 2 は、自律的な世界 3 の対象と相互作用するからである。例えば、自然数の無限数列 $0,1,2,3,4,5,\dots$ は、人間精神の産物である。このような世界 3 は、世界 2 によって創造されたことになる。しかしながら、それらの理論は、生み出された瞬間に人間活動の意図しない諸問題を導く。つまり、人

間が創造した世界 3 の大部分は、自律性を保つものである。そこで、ポパーは、部分的に自律的な世界 3 を発見するべきであると主張する。したがって、未解決な素数の問題は、発見される以前の状態で存在する。すなわち、世界 2 は、自然数列が偶数と奇数からなっているという事実を変更できない。このことは、世界 3 のフィードバック効果として 3 世界論の特質となる。とりわけ、フィードバック効果とは、世界 3 の大部分を占める人間的行為の意図しない要因である。その観点から部分的に自律的な世界 3 は、個人の創造的行為をもはるかに超えて成長する。しかも、それは、あくまで発見されるべき理論である。

このようにポパーは、自律的な世界 3 の諸対象を理解する意味で人文科学の中心問題について解決しようと試みる。確かに理解するという行為は、主観的で心理学的な活動ではある。その知的活動は、本質的に世界 3 の対象を操作するものである。すなわち、世界 2 という主観的な心的過程は、世界 3 の対象を生み出す。それにもかかわらず、生み出された瞬間に人間活動の意図しない諸問題は、副産物としてフィードバックされる。この事実は、あらゆる手段を用いても変更できない特質をもつ。そうした理解の活動は、あくまで世界 2 という心的過程の媒介と世界 3 の用語を用いることではじめて分析できる。それとともにポパーは、想像力に富む推測と批判の方法による問題解決という図式的分析を試みる。それは、世界 3 の対象を操作する目的で次のように図式化される。

$$P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2$$

「 P_1 」(Problem₁) は、われわれの出発点となる問題である。「TT」(Tentative Theory) は、最初に到達する想像力豊かな推測的解決でありながら、暫定的解釈でもある。こうして次に至ると「EE」(Error Elimination) は、誤りの排除として厳しい批判的吟味を示す。そのような過程を通して「 P_2 」(Problem₂) は、最初の批判的試みから生じるのである。この新しい問題状況は、第 2 の試みへと導かれる。例えば、「 P_1 」は、後にくる問題「 P_n 」と比較することで進歩の評価を確証できる。とりわけ、この図式的分析は、問題、推測、理論、批判的議論といった世界 3 の対象を操作するものである。それは、理解の活動という主観的行為によって発見するべき問題である。この世界 3 は、あくまで部分的な自律性を保つ。

まとめとして本発表では、ポパーの 3 世界論という特殊な思想を明確にする。そこで、重要な論点となるのは、3 つの世界から成立する相互作用論と世界 3 の自律性、図式的分析 ($P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2$) である。